

小学校で養われる英語力についての研究

—ケンブリッジ英検ヤングラーナーズテストを使った事例研究—

How Much and What Can Children Learn in English Classes in the Japanese Context?

—A Case Study on a Private Elementary School Using The Cambridge Young Learners English Tests—

米 田 佐 紀 子 (北陸学院短期大学)
村 上 好 江 (北 陸 大 学)
高 田 功 (北陸学院小学校)
ギャビン・リンチ (北陸学院短期大学)
前 垣 内 紀 三 子 (北陸学院短期大学)

Abstract

The goal of our project is to evaluate and see how much and what Japanese elementary school children can learn in English classes in Japan using the Cambridge Young Learners English Tests as an assessment tool. This is a report on our project, which received a grant from Hokuriku Gakuin Junior College for the academic year of 2006.

The elementary school's English education as EFL requires a lot of personnel effort and materials, but the fruit of the education has not been fully and objectively assessed.

In this paper, we first see what effect the education at elementary schools has on that of junior high schools. We will then show details about the background of our subjects and, lastly, we will analyze and discuss the results of the Cambridge Young Learners English Tests held in May, 2006.

In the analyses and discussions, we compare the results of our subjects with those of the Japanese examinees and Korean examinees. This allows us to evaluate the current English education in a single Japanese elementary school in terms of a certified world standard.

1. 序論—研究の目的・方法と概要 (米田 佐紀子)

本論文は2006年度に認められた北陸学院短期大学での共同研究「小学校英語教育における学力についての研究—児童英語検定試験を使って」の中間報告となるものである。本研究の目的は、「小学校での6年間の英語教育の実績、つまり、6年生児童の英語の学力を四技能それぞれについて客観的に測定することにより、どこまで小学校で英語力をつけることができるかを探るこ

と」である。

上記の測定のために、方法としてケンブリッジ英検ヤングラーナーズテスト (Cambridge Young Learners English Tests、以下 YLE と略す) を用いた。テストについては後ほど詳細に述べる。

本テストを用いるメリットは次の通りである。

- (1) 本学児童が日本全体の中でどのくらいに位置するのかが判断できる。
- (2) 本学児童が国際的に見てどのくらいに位置するのかが判断できる。
- (3) 我々の教育を改善していく知識や教授法に対する示唆が得られる。

現在、日本中の小学校の9割で英語活動(教育)が行われているという¹⁾。その一方、小学校英語教育は、中学校以上の授業に比べ、使用する教具・教材が多く、教師の指導力や工夫が求められ、負担は大きい。大きな負担を背負ってまで英語教育を行おうとする背景には、ランゲージ・ディバイド²⁾の懸念や臨界期説³⁾から来る早期英語教育に対する誤信が存在している⁴⁾。

しかし実際のところ、小学校での英語教育の成果についての客観的データは不足しており、本当に多くの負担を背負ってまで行う意味があるのかについて多くの議論がなされている⁵⁾。また小学生にとって適切な評価とはどのようなものかという点でもまだ研究の必要がある。我々の研究はそういった小学校英語での成果を客観的に評価しデータを積み上げるために行っているものである。

本論文では、第2章で、北陸大学で教鞭をとる傍ら、自ら塾で小学生から高校生までを教えている村上が、自らの経験から、小学校英語を経験した中学生の英語力を分析する。

第3章では、今回のデータを得た北陸学院小学校の背景や英語教育の概要を、小学校長である高田と、英語教師である前垣内・米田が分担して述べている。第4章では YLE の結果について外国人教師であるリンチが主に分析を行い、それに基づいてリンチ・米田の両者が考察を行う。

この研究により、小学校英語教育のあり方そのものを見直すだけでなく、その後続く中学校以降の英語教育をいかに進めていけばよいかという検討材料を提供することになる。

2. 小学校英語と中学校英語の連携について(村上 好江)

小学校での英語教育の意義は一体あるのかなのか。本章では筆者が教えてきた中学生を中心に、小学校英語教育の影響が中学生になってどのように見られるのかを調査したことについて述べる。

2.1 小学校から英語学習を始めた中学生の現状

筆者は小・中学生に英語を英語教室(私塾)で教え始めてから、30年近くになる。初めは小学校高学年・中学生に英語を教えていたが、18年ほど前から、小学1年生から教え始めるようになった。

筆者が住んでいる金沢市は、2005年に英語教育特区になり、公立の小学校で小学3年生以上に、年間35時間の英語の授業を始めた。3年生から5年生は金沢市教育委員会が作成した教材を使い、小学6年生は中学校1年の教科書を使い始めた。

小中一貫英語教育特区になり、公立の小学校で英語教育が始まってから、入塾して来る児童に明らかな変化が見られるようになった。例えば、小学5・6年から入塾する児童は、それ以前の児童とは異なり、アルファベットの大文字はほとんど理解している。さらに、英語の簡単な挨拶に対して、英語で答えられる児童もいる。

筆者の英語教室がある金沢市の地域は、特区に先駆けて、2001年から3年間小中一貫英語教育のモデル地域になった。2004年には金沢市が独自の小中一貫英語教育を始めた地域でもある。英語教室に通うほとんどの生徒はこのモデル地域の小学校と中学校から通って来る者たちである。

本論文では、筆者の英語教室に通う小学校時代から通っている中学生を通して、小学校英語の影響がどのように見られるのかを述べる。彼らは、小学校4年から公立小学校(モデル地域の小学校)で英語教育を受け始めた中学生(2006年10月現在中学3年生)である。

この生徒達は、小学生の時に、(財)日本英語検定協会主催の児童英語検定(以下「児童英検」と略す)、中学生の時期には実用英語技能検定(以下「英検」と略す)を受験した。筆者が教えている英語教室では、児童英検についてはクラスの全員が無理なく受験できる位に学力がついた頃に受験するように勧め、英検に関しては希望者だけが受験するようにしている。

以下がその結果である。

表1 英語検定合格時期 (2006年10月現在)

生徒	児童英検(3級) ブロンズ	児童英検(2級) シルバー	児童英検(1級) ゴールド	英検5級	英検4級	英検3級	英検準2級
A	小学4年	小学5年	小学6年	/	中学1年	中学2年	中学3年
B	小学4年	小学5年	小学6年	小学6年	中学1年	中学2年	/
C	小学4年	小学5年	小学6年	小学6年	中学1年	中学2年	/
D	小学6年	/	/	/	中学1年	中学2年	/

例年だと中学2年で3級を受ける生徒は少ないのだが、この学年は自ら3級を受けることを希望しており、これは小中一貫英語教育を受けてきたという生徒自身の意識の表れと考えられる。中学1年(2004年)の時には、通学先の学校で研究授業が行われ、多くの英語教師が授業参観に来、メディアで放送されるなど注目を集めた。

上記の表からは、中学2年で英検3級に全員合格し、中学3年生で一人が準2級に合格していることが分かる。英語に対する関心と意欲が現れていると言える。また、筆者は1993年から(財)日本英語検定協会主催の実用英語検定試験の面接委員をしているが、金沢市が英語教育に力を入れ始めてから、中学3年での英検準2級の受験者が多くなってきたと感じている。次の表2と表3は(財)日本英語検定協会に問い合わせた結果分かった、2003年から2005年までの3年間の金沢市内の中学生の英検準2級と3級の受験者数と合格者数の推移である⁶⁾。

米田 佐紀子・村上 好江・高田 功・ギャビン・リンチ・前垣内 紀三子

表2 金沢市内の中学生の英検準2級受験状況 (資料:財団法人 日本英語検定協会)
(単位:人)

年度 数	2003年度		2004年度		2005年度	
	志願者	合格者	志願者	合格者	志願者	合格者
1年	9	4	7	1	9	3
2年	60	20	53	29	100	41
3年	249	99	253	119	354	182
合計	318	123	313	149	463	226

表3 金沢市内の中学生の英検3級受験状況 (資料:財団法人 日本英語検定協会)
(単位:人)

年度 数	2003年度		2004年度		2005年度	
	志願者	合格者	志願者	合格者	志願者	合格者
1年	47	26	44	28	60	30
2年	429	244	539	383	738	516
3年	1767	1016	1700	1064	1691	1123
合計	2243	1286	2283	1475	2489	1669

これを見ると中学生の受験者数は着実に伸びており、筆者の実感を裏付けるものとなっている。小学校英語教育の1つの成果と考えられるだろう。

2.2 英語学習に対するアンケート調査の結果と考察

ここでは小学校から英語を学び続けている4人の中学生が、英語学習についてどのように考えているのか、アンケートを通して見ていく。

表4 英語学習に対するアンケート結果 (単位:人)

質問	とてもそう 思う	そう思う	ふつう	あまりそう 思わない	全然そう 思わない
1. 英語が好きですか。	4	0	0	0	0
2. 小学校から英語を習っていてよかったですか。	4	0	0	0	0
・外国人講師との英語の練習がよかった。	2	2	0	0	0
・絵本がよかった。	2	2	0	0	0
・コースブックがよかった。	1	3	0	0	0
・フォニックスがよかった。	4	0	0	0	0
・単語の本がよかった。	2	1	1	0	0
3. 今、中学3年の英語の単語は覚えやすい。	1	2	0	0	1
・ヒアリングはやさしい。(聞く)	3	0	0	0	1
・英語の読み物は理解しやすい。(読む)	2	2	0	0	0
・英作文が書きやすい。(書く)	0	2	1	0	1
・外国人と話すことに抵抗がない。(話す)	0	1	3	0	0

4人とも小学生から英語を学習していて良かったと思っており、英語が好きと答えている。絵本については、筆者は絵本を読んだ後にブックレポートを書かせているが、それが面倒だったとの声も聞かれた。

現在中学3年である彼らの英語に対する感想は、「聞く・話す・読む・書く」の観点から見ると、3人は四技能ともに出来るという実感を持っている。これは中学校における中間・期末・実力テストにも表れている。それに対して、「全然そう思わない」と「聞く・書く」の欄につけた

1人にフォローアップ・インタビューをしたところ、「中学2年までは良く分かった。」という答えが得られた。この生徒は中学3年になって、苦手意識を持ち始めており、中学校における中間・期末・実力テストにも表れている。ここから考えると、小学校低学年から習い始めても、中学校後半になると個人差が出てくるのだと言える。

ここに挙げた4人の中学生は英語が好きだし、得意科目にしている傾向がある。今回の対象ではないが、中学になって英語教室に入ってきた生徒の中には、英語が分からなくなってから入ってきた生徒もおり、その差は歴然としている。学力差が出るのは当然と受け取られがちであるが、実際には、金沢市内の小学校で英語教育が始まってから、英語が得意で高得点を取る生徒と低い点しか取れない生徒との差が大きくなったと感じている。今後とも調査していく価値があると考えられる。

2.3 まとめ

本章では筆者の英語教室に来ている生徒に限って、4人の生徒に焦点を当て、小学校英語の影響が中学校3年生でどのように見えてきたかについて述べた。

今回はデータが少ないこと、また公教育で英語が始まったばかりであるので、結論付けることはできないものの、現時点では小学校で始めた生徒は英語に対する前向きな姿勢や学力の点でプラスに働く傾向があるようである。今後さらに多くの追跡調査をし、分析していく必要がある。

3. 北陸学院小学校の概要

3.1 概要と目標 (高田 功、米田 佐紀子)

本研究が行われている小学校は北陸学院小学校という石川県金沢市内の私立小学校である。学校法人北陸学院の一部である。北陸学院には幼稚園(三園)、小学校、中学校、高校、短期大学がある。小学校は、各学年定員30名で1クラスという小規模校である。

保護者の英語教育に対する関心は高く、2006年7月に米田が行った英語教育に関するアンケート調査(135家族配布中95家族解答)では、北陸学院小学校を選んだ理由に48家族が「英語を重視した」と答えており、85家族が「小学校での英語教育に賛成」と答えている。

帰国子女や外国人を親に持つ児童は現在7名在籍しており、多い時には合計10名を越えていたこともある。この地域では国際色豊かな学校としての評価を得ている。また、オーストラリアに、姉妹校を持ち、定期的に交流会をしたり手紙のやり取りをするなど国際交流にも力を入れている。

北陸学院小学校では英語は「教科」として1年生から6年生まで40分授業を週に2回行っている。英語科の目標として、以下の3つを挙げている。

- ① 自己表現力を含むコミュニケーション能力
- ② 十分な語学力(会話だけにとどまらず読み書きの能力を併せ持つ)
- ③ 地球的視野と異文化理解

教科書にはオックスフォード大学出版の *Magic Time*⁷⁾ と *English Time*⁸⁾ を使い、各ユニットごとに聞く・話す・読む・書く、の四技能のテストをし、「コミュニケーション能力」をオーラ

米田 佐紀子・村上 好江・高田 功・ギャビン・リンチ・前垣内 紀三子

ルだけではなく、読んだり書いたりする力もつけていくよう配慮している。通知表にも「関心・意欲・態度」「聞く・話す」「読む・書く」「知識・理解」の項目で、それぞれ「積極性」と「到達度」の観点から評価を行い、保護者に知らせている。

2004年度と2005年度には(財)日本英語検定協会主催の実用英語技能検定の5級を、5, 6年生の希望者に実施しており、両年度ともに9割以上の合格者を出している。2006年度の6年生ではクラスの半数の児童が5年生の段階で実用英語技能検定5級に合格した。児童の英語力の詳細については第4章で述べる。

3. 2 授業体制・教材と課題 (前垣内 紀三子)

本章では本研究の対象となる6年生が、どのような教育を受けてきたのか、その背景となる英語教育の授業体制・教材と課題について述べる。

3. 2. 1 授業の体制

北陸学院小学校では、すでに述べたように全学年を通して週2時間の英語が「教科」として教えられている。北陸学院短期大学の米田がスーパーバイザー兼指導者として関わる中で、北陸学院高校や北陸学院短期大学に勤務する外国人教師と、日本人英語教師である筆者が授業を行っている。今まで携わってきた外国人教師はアイルランド人・アメリカ人・オーストラリア人・カナダ人などであり、児童に多様な英語に触れる機会を与えている。音やリズムが微妙に異なり、教師の変更の際には、特にフォニックスの指導の場面で児童に負担がかからないよう指導に配慮している。

担任の教師が英語の授業を行うことはない。しかし、担任教師は児童の実態や日ごろの授業態度などを一番良く理解しているため、学校行事や成績に関してだけではなく、宿題の提出に関することなどについて情報交換をし、協力体制を常にとっている。担任教師からの児童に関する情報なくして、実際に英語の授業運営を行うことは難しく、また危険であると考えられる。

指導案の作成は、日本人教師がまずたたき台を作り、筆者・外国人教師とスーパーバイザーの米田の計3名でミーティングを持ち、1時間の流れや各段階の細かな指導方法を確認する。北陸学院小学校がある金沢市内の公立学校では、担任教師と英語担当者が十分なミーティングを持つことが難しいと聞いているが、本学でこのミーティングが可能なのは同一キャンパス内に小学校・短期大学の校舎があるためである。

英語教育を専門的に勉強した日本人教師に加え、毎時間必ず外国人教師が授業に入るというのは、現在一般に行われている小学校での英語教育と比べると、恵まれた環境にあると言える。

3. 2. 2 使用教材

北陸学院小学校の英語教育は四技能を伸ばすことを目標としている。教科書もその流れに沿ったものが望ましい。

児童用に出版されている教科書の多くはほぼ似たり寄ったりで、表記が簡潔にまとまっているかのように見えるが、いざ使用してみると、定着させるためには教科書準拠の教材では不十分で、

教材を自作しなければならなくなる。30人クラスには提示教材が小さすぎるという問題も出てきた。

2005年度より、オックスフォード大学出版の *English Time* を使用し始めた。本教材は主に文法シラバスに則っているが、各ユニットごとに“Conversation Time”（文脈に入った会話文のページ）、“Practice Time”（ターゲットとなる文法項目を練習するページ）、“Phonics Time”（フォニックスを提示し練習するページ）で成り立っている。中学校英語であれば、まとめて肯定文と否定文が提示されることもあるが、この教科書では、異なった場面や異なった語彙を用いつつ、ユニットごとに徐々に肯定文、否定文、疑問文と提示され練習を積むことができるようになっており、児童への負担が配慮されている。これに沿ったワークブックもあるのでより多くの練習をすることができる。

各学年、1年間で1冊の教科書を終えることをめざしていたが、定着を図り、実際に児童がターゲットセンテンスを使いこなすことを目標とすると、1冊の教科書に2年間要することになりそうである。理想と現実の差を埋めることはなかなか難しい。現在の6年生はBook 3を5年生から使用し、ほぼ半分が終わったところで6年生に入った。

今後の課題として、上記のように進度の課題を解決すると同時に、同じ教材を使用してもクラスが違くと、進度や理解度が異なることがあり、その違いが、児童が学んでいるどの教科にも見られる学力差によるものか、教師の指導によるものか、あるいは他に何か要因によるものか研究していくことが必要である。

3. 2. 3 課題とまとめ

前章で村上が述べているように、学年が上がるにつれ、広がる学力差が課題として浮かび上がっている。言語材料をスパイラルに配列し積み上げ学習を行っているものの、学年が上がるにつれ徐々に学力に差が見られるようになり、それをいかにフォローしていくかが目下の課題である。

これまで、必要な時には、補習という形で週に1度放課後に行い、通常のクラスではできない個人指導を行った。その効果は大きかったものの、児童と保護者、英語教師や担任教師の負担も大きかった。

本学院小学校は、公共交通機関の便が悪く、補習のためにスクールバスで帰れない児童の帰宅方法を考慮しなければならない。保護者に迎えの時間の変更や依頼をすることも考えねばならない。また物理的な負担だけでなく、「補習」という言葉に過敏になる保護者や児童もおり、いかに前向きな姿勢で補習に参加できるような精神的配慮も必要である。

進度・学力差・補習など、理想と現実との狭間で今後解決していかなくてはならない課題は多い。

4. ケンブリッジ英検ヤングラーナーズテスト結果と分析（ギャビン・リンチ、米田 佐紀子）

この章では北陸学院小学校において実施したケンブリッジ英検ヤングラーナーズテスト（Cambridge Young Learners English Tests 以下「YLE」と略す）のStartersの結果と分析について述べる。分析はリンチが行った。リンチの分析に基づきリンチと米田が考察を行った。

4. 1 YLE 実施の目的と意義、概要

国際社会で活躍する日本は産業界やビジネス界の評価に様々な国際的基準を用いている。国際的基準を使用することは、世界の国々と同じ土俵で結果を比較できるだけでなく、世界に認知してもらうことにもつながっている。

我々の行っている教育についても同様に、国際的基準によって測定し、その結果を報告することは、国際社会で英語を使って活躍できる日本人を育成していくという点からも必要である。曖昧さと偏りが少ない国際的評価基準を使うことによって、自分たちの指導方法を地球規模の視野で検討することになり、ひいては他国の教育システムと比較し、またそれらから学ぶことができると考える。

本研究の対象として、6年間英語を学んだ児童に客観的テストにより学力を測るにあたり、本学院小学校の目標に鑑み、四技能が見られるテストであり、なおかつ、すでに実用英語技能検定5級を持っている児童を学級に半分含む6年生の児童の英語の伸びを1年間に渡って見られるものを探した。共同研究開始当初計画していた(財)日本実用英語技能検定協会の児童英検では四技能が見られないことや実用英語技能検定5級の前段階にあたるテストであることから、国際的基準であり、四技能が測れる YLE が我々の目的に照らし合わせて適切であると判断した。

YLE とは Cambridge EFL 検定の1つであり、ブリティッシュカウンシルを含め、様々な教育機関によって採用された世界的に認知されたものである。1858年より、英国ケンブリッジ大学の海外試験評議会 (Cambridge ESOL = English for Speakers of Other Language) で研究・開発され、世界135ヵ国以上の国々で毎年約100万人が受験している⁹⁾。読む・書く・聞く・話すの四技能を総合的に評価し、国際基準から受験者の英語力を判定し、スピーキング試験は、ケンブリッジ大学によって認定された試験官が行う。Cambridge EFL 検定は英語を母語としない者を対象としたテストで、5つのレベルからなり、一般英語やビジネス英語、児童学習者向けテストや語学教師向けテストなどがある。

Cambridge EFL 検定には、「基礎級」の「レベル1」から「最上級」の「レベル5」にいたるまで、Association of Language Testers in Europe (ヨーロッパ語学検定協会) によって確立された5つの評価基準がある。「レベル1」とは「身近な状況下で必要とされる基礎的な言語使用が出来る」レベルを指し、英国や北米の大学・大学院に入るには「レベル4 (上級)」以上が必要とされる¹⁰⁾。

今回北陸学院小学校で使用したケンブリッジ英検ヤングラーナーズテストはケンブリッジ大学が児童(7歳~12歳)を対象に考案したテストで、3つのレベル (Flyers, Movers, Starters) から成る。最上級である Flyers は Cambridge EFL 検定の「レベル1」に照準を合わせた内容になっている。YLE では合格・不合格がなく、結果は5つの盾 (shield) を最高として盾の数で示される¹¹⁾。盾の数で表された賞状をもらうので、児童にもプレッシャーを与えることなく実施することができる。各レベルとも盾の数が合計10-11個になると1つ上の級を目指す力を持っていると判断される。

このようにして、YLE は Cambridge EFL 検定の Main Suite (一般英検) にもつながるものとなっており、将来国際舞台で活躍できる人材育成の基礎作りを目指している本学児童の学力を測

り指導に役立てるためには適切なものと判断した。

YLE はすでに日本でも実施されており、その点において、我々の教育の結果を日本の他の受験者と比較することもできる。

4. 2 被験者

本研究の被験者は、小学校6年生24名である。どの児童も学校でも家庭でも日本語を使用する者で、英語圏からの帰国子女はいない。

テストに際し、児童と保護者に研究の目的を説明し、授業では児童が形式に慣れる程度の必要最低限の準備のみ行った。

4. 3 方法

前述したように、この研究の目的は、客観的に測定することにより6年間での英語教育でどれだけの学力がつけられるかを探ろうとするものである。今回使用したレベルは Starters である。

テストはリスニング、リーディング、ライティング、スピーキングの四技能を測るもので、3部(第1部リスニング、第2部リーディングとライティング、第3部スピーキング)から成る。リスニング、リーディング、ライティングはペーパーテストで、スピーキングは面接で行われる。第1部と第2部のセクションでは、色鉛筆を使用して塗り絵をするなど楽しめる箇所もあれば、ヒントに基づいてスペルを書き込むという難易度の高いセクションもある。

テストは英語のみで行われるため、児童がきちんと指示を理解しておかねば、適正な評価ができなくなる。準備には市販されている *Cambridge Young Learners English Tests Past Papers*¹²⁾ を使用した。しかし、テストのために多くの時間を割くと日常のカリキュラムにも大きな影響を与える。そこで、準備は、本来のカリキュラムへの影響も考えて準備にあまり時間を割かないようにした。児童には1時間目に授業中で説明し、宿題で残りをやらせ、授業で答え合わせをするというやり方で、合計2時間ほど、また面接テストの準備で1時間、合計3時間を割いた。児童は概ねこれで要領を掴んだようである。3時間で準備がすんだのは、YLE が児童の発達段階を掴んで作成していることや、日常的に授業で四技能の学習をしていることによると考えられる。

担任教師とも連携を図り試験会場への誘導や時間割の変更などに協力してもらった。Cambridge ESOL 認定の試験官が来校し、ケンブリッジの試験要領に沿ってテストが適切に行われるよう監督に入った。

4. 4 結果と分析

4. 4. 1 日本人受験者平均点と比較した結果と分析

前述したように、YLE は3部から構成される。

第1部 リスニング

第2部 リーディング・ライティング

第3部 スピーキング(面接)

それぞれのセクション結果は、前述したように、ケンブリッジの盾1枚を用いて最高5枚の盾

米田 佐紀子・村上 好江・高田 功・ギャビン・リンチ・前垣内 紀三子

が満点として示される。(この論文では、便宜上、盾1枚を「1点」として、点数で記載する。)ゆえに、3部を全部合計すると15点となる。最低点は盾1枚、つまり1点となり、すべてのセクションで最低点を取った場合、その受験者の得点は3点ということになる。これを表にしたものが次の表1である。

表1 各セクションの最高点と最低点、合計点 (単位:点)

	リスニング	リーディング・ライティング	スピーキング	合計点
最高点	5	5	5	15
最低点	1	1	1	3

Cambridge ESOL results service¹³⁾によると、日本人の受験者は年間400人以上という。我々の児童24人の約17倍に当る数字となり、比較するには意義のある数である。日本人の平均点を見ることにより、本学児童の位置を確認することができる。以下の表2は過去2年間の日本人のYLE受験者の平均である。

表2 日本人受験者(年間400人以上)の平均点 (単位:点)

	リスニング	リーディング・ライティング	スピーキング	合計点
最低点~最高点	1~5	1~5	1~5	3~15
2004年日本人受験者平均点	3.55	2.09	3.70	9.34
2005年日本人受験者平均点	3.58	2.56	3.89	10.03
2004-2005年日本人受験者平均点	3.57	2.33	3.80	9.69

この結果からすると、日本人受験者はリスニングとスピーキングセクションで、リーディング・ライティングセクションよりも良い点数を取っていることが分かる。

テスト実施から6週間で本学児童の結果が送られてきた。児童によって良かったセクション、良くなかったセクションには個人差があるが、そこにある一定の傾向が見られた。まず結果から見ていこう。表3は本学児童の平均点であり、それを日本人受験者とも比較した表である。

表3 本学児童の平均点と日本人受験者の平均点の比較 (単位:点)

	リスニング	リーディング・ライティング	スピーキング	合計点
本学児童最低点~最高点	2~5	1~4	2~5	5~13
本学児童平均点	3.38	2.75	4.13	10.25
2004-2005年日本人受験者平均点	3.57	2.33	3.80	9.69

ここで分かるように本学の児童はスピーキングで平均点を0.33ポイント上回り、高い得点を出していることが分かる。日本人受験者の平均点が3.80であるのに対し、本学児童は4.13で、5点満点を取った者は13名で過半数を超えた。またこのセクションで1点を取った者はいない。

リスニングでは日本人受験者の平均点が3.57のところ、本学平均点は3.38と0.19ポイント下回っているものの、やはり1点を取った者はおらず、満点を取った者も2人となっており、一定の聞く力を持っていると判断される。

リーディング・ライティングのセクションでは1~4と満点がおらず苦戦した様子が伺える。

その一方、平均点は2.75で日本人受験者平均点の2.33に比べると0.42高くなっている。日本人にとってこのセクションが難しいものであることが分かる中で、本学児童がこの得点を取ったのは、授業で多くの時間をスピーキングだけでなくリーディング・ライティングにも割いている結果と考えられる。

日本人の平均点より上回った児童と下回った児童の対比表が次の表4である。この表で分かるように日本人受験者全体の傾向からすると、本学児童はリーディング・ライティングセクションとスピーキングセクションで平均点を上回る児童が多く見られることが分かる。

表4 日本人受験者平均点と比較した本学児童の結果 (単位：人)

	リスニング	リーディング・ライティング	スピーキング	合計点
日本人受験者平均点以上の本学児童数	11	15	16	14
日本人受験者平均点以下の本学児童数	13	9	8	10

以上、表3と表4で日本人受験者平均点と比較して本学児童を見てきた。この結果では、本学児童にも日本人受験者にも同じ傾向が見られる。つまり、スピーキングが最も得意で、次にリスニング、そして最後にリーディング・ライティングが最も苦手とするものであるという傾向が表れている。ここから、日本での指導法はどれも似たようなものであるとも考えられるし、あるいは指導法が異なっても児童は同じように学んでいくという日本人共通の傾向が示されているとも考えられる。

いずれにせよ、本学児童の合計平均点は10.25点と Starters レベルを卒業し、次の Movers を受験しても良いレベルに達していることが示されており、今後はリーディング・ライティングに加え、リスニングの向上も目指すような指導上の工夫が必要であることが分かった。

また YLE は7歳～12歳向けであるとされているが、具体的に何歳がどれくらいの割合で受けているかの発表はない。ケンブリッジ関係者から聞いた話では団体受験した場合には中学校1年生の場合、受験資格があるとみなされ、その中には13歳も含まれているという。今回のテスト結果を分析するに当たりその点も考慮に入れる必要がある。

4. 4. 2 韓国人受験者平均点から見た結果と分析

他の国の教授法やテスト結果を知るとは自らの指導を向上させていく上でも必要なことである。実際、英語は世界の共通語として使用され、別の母語を持ちながら英語を話す人の数は、英語を母語とする人口よりも上回っている。適切な研究結果を得るためには、同じような境遇にある者同士を比較することが重要である。

そこで、我々は、母語の文法体系や地域的・経済的な環境が似ている韓国と本学児童を比較することにした。

韓国の YLE 受験者のデータは前出の Cambridge ESOL results service から得たものである。次の表5は韓国人受験者のデータである。

米田 佐紀子・村上 好江・高田 功・ギャビン・リンチ・前垣内 紀三子

表5 韓国人受験者の平均点 (単位: 点)

受験者数は不明	リスニング	リーディング・ライティング	スピーキング	合計点
最低点～最高点	1～5	1～5	1～5	3～15
2004年韓国人受験者平均点	4.43	3.25	4.69	12.37
2005年韓国人受験者平均点	4.32	3.11	4.51	11.94
2004-2005年韓国人受験者平均点	4.38	3.18	4.60	12.16

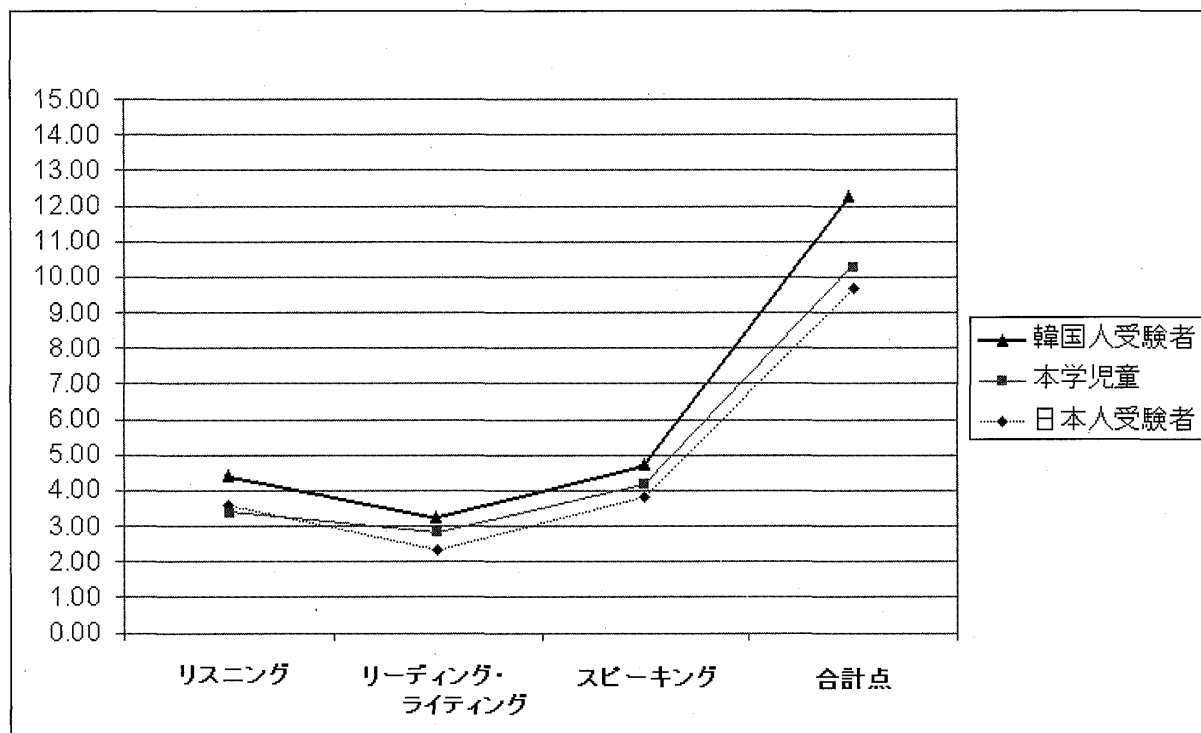
一見して分かるように韓国人受験者の平均点はかなり高い。日本人受験者と比較した次の表6でこの点数差が歴然とする。

表6 韓国人受験者と日本人受験者、本学児童の平均点の比較 (単位: 点)

	リスニング	リーディング・ライティング	スピーキング	合計点
最低点～最高点	1～5	1～5	1～5	3～15
2004-2005年日本人受験者平均点	3.57	2.33	3.80	9.69
本学児童平均点	3.38	2.75	4.13	10.25
2004-2005年韓国人受験者平均点	4.38	3.18	4.60	12.16

韓国人受験者の得点はかなり高いものである。点数にここまで開きがある理由は何なのかを今後研究していく価値があるだろう。次のグラフ1は表6を視覚的に見やすくしたものである。

グラフ1 韓国人受験者と日本人受験者、本学児童の平均点の比較 (単位: 点)



一定の傾向があることが一目で分かる。スピーキングが一番高く、次にリスニング、最後にリーディング・ライティングとなっている点で、日本人受験者の得意・不得意領域と同じ傾向になっている。このことは何を意味するのだろうか。韓国と日本での教授法が似ているからだろうか。それとも、教授法に関係なく、韓国人も日本人も同じように英語を習得しているのだろうか。テ

ストは、国際的なもので文化的偏りがないとは言うものの、何かアジア地域に住む児童には不利に働く可能性もあるということだろうか。様々な要因については今後研究を重ねて解明していくべきものであろう。

いずれにしてもこの結果は本学での指導がリーディングとライティングに強く、リスニングに弱い傾向があるので今後強化していかねばならないことを示している。

韓国人受験者が日本人受験者と比較して点数が良いことは明らかであるが、Cambridge ESOL results service から全世界を見てみると必ずしも良いとは限らない。今後世界に目を向けながら英語教育に取り組んでいく必要性を示している。

4.5 まとめ

当初の目的であった「小学校での6年間の英語教育の実績、つまり、6年生児童の英語の学力を四技能それぞれについて客観的に測定することにより、どこまで小学校で英語力をつけることができるかを探ること」は、テスト一回で結論付けることはできないにせよ、ある程度達成された。

この章では本学6年生児童を世界的に認知されている YLE の Starters で測定し、日本人受験者と比較し、その後、母語体系の似ている韓国人受験者と比較した。

本学児童は全体的には日本人受験者平均点よりも上回ったものの、リスニングでの強化が必要であることが分かったと同時に、韓国に比べると全体的に下回ることも分かった。

しかし、どのテストにもあるように点数を鵜呑みにすることは危険である。本学の児童は形式に慣れる準備しかしておらず、YLE のワードリストなどを使ったいわゆる「受験対策」を行っていない。何度も受験を繰り返すなどの受験対策をした受験者もこの点数の中に入っている可能性もあり、その点では本学児童は不利であったと考えられる。

また、YLE ではそれぞれのセクションを盾の数で示され、実際の得点は公表されない。つまり、例えば、4点（本論文では、便宜上「4つの盾」だったら「4点」として表記した）と示された場合、全体の何%で4点なのか、また、4点といっても5点に近い4点なのか、3点に近い4点なのかどうか分からない。さらに精密な研究を進めるためにはもっと具体的な数値が必要である。

6年生児童を教えている教師としては、初めてのテストでここまでの得点を取れたことに満足している。今後、より良い教育をしていきたいと考えている。

5. 結論（ギャビン・リンチ、米田 佐紀子）

本論文では、小学校での6年間の英語教育の実績を客観的に測定することを目的として、ケンブリッジ英検ヤングラーナーズテスト（Cambridge Young Learners English Tests）の Starters を実施した結果について述べてきた。小学校での英語教育の成果が見えないまま時間と労力を使っていることに対して、世界的に認知され、使用されているケンブリッジ英検を使うことによって、少人数ではあるが、本来の目的である客観的データを得ることが出来た。

小学校での英語教育の意義を考えるにあたり、第2章では小学校英語教育が傾向としてプラスに働いているものの、学年を重ねるにつれ学力差が出てくる実態について述べた。その一方、金

米田 佐紀子・村上 好江・高田 功・ギャビン・リンチ・前垣内 紀三子

沢市内の実用英語技能検定においては中学生の受験者数・合格者数でここ数年ともに増加していることから小学校英語の一定の成果が出ていることが示された。

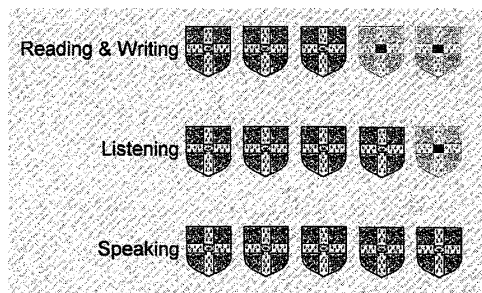
第3章ではテストを受験した6年生がどのような教育を受けてきたのかについて詳細に述べた。続く第4章では、本学児童のケンブリッジ英検の結果について分析し考察を行った。まず日本人受験者の結果との比較では、本学児童はスピーキングで大きく日本人受験者を上回る得点を取っている反面、リスニングで少々劣ることが分かった。その一方、一人で学習することができるために欠かせない、リーディングとライティングのセクションでは日本人受験者平均点を上回る得点を取り、日頃の学習の成果が表れたと考える。一方、母語体系や地域が近い韓国と比べると、得点が下回ることが分かり、更なる研究と指導の改善の必要性が示された。

研究と実践を重ねることにより、より効果的な指導につながり、将来英語を使って国際舞台で活躍できる日本人の育成の一端を小学校英語教育がどのように担うべきかが見えてくると考える。

今回はデータの数が24名と小さいことや、児童があまりこのタイプのテストに慣れていなかったことを考えると、小学校英語の成果をさらに実証的に検証するために、引き続き研究を重ねていく必要がある。

注

- 1) バトラー後藤裕子 『日本の小学校英語を考えるーアジアの視点からの検証と提言』 三省堂 2005年 p.12
- 2) ランゲージ・ディバイドー 英語ができる、できないによって社会経済階層が分かれてしまうこと。
- 3) 臨界期説ー 動物行動学からきたもので、一定の時期が過ぎてしまうと本来持っている刷り込み現象が起らなくなるという生得的メカニズム。
- 4) バトラー後藤裕子 『日本の小学校英語を考えるーアジアの視点からの検証と提言』 三省堂 2005年 p.100
- 5) 勝山ひとみ、西垣知佳子、王金芳 「児童の英語力テストの結果に見る小学校英語の効果」『KATE Bulletin』第20号 2006年 関東甲信越英語教育学会
- 6) 財団法人 日本英語検定協会 広報課への問い合わせによって得た資料
- 7) Kampa, Kathleen & Vilina, Charles. *Magic Time 1 & 2*. Tokyo: Oxford University Press. c2001
- 8) Rivers, Susan & Toyama, Setsuko. *English Time 1-3*. Tokyo: Oxford University Press. c2001
- 9) 『ケンブリッジ英検概要』 <http://www.mic39.com/cambridgegaiyou.htm>
- 10) 『ケンブリッジ英語検定のご案内』 University of Cambridge Local Examinations Syndicate c1999
- 11) 結果は盾を使って下のサンプルのように表示されて返却される。ここでは、各セクション5点満点のところ、リーディング・ライティングが3点、リスニングが4点、スピーキングが5点で示されている。



12) *Cambridge Young Learners English Tests Past Papers*. Cambridge University Press. c2001.

13) Cambridge ESOL results service. ケンブリッジ英検の結果を知ることが出来るインターネットサービス
<https://cambridgeesol-results.org/>

参考・引用資料

Cambridge ESOL results service. <https://cambridgeesol-results.org/> 2006年10月

Cambridge Young Learners English Tests Past Papers. Cambridge University Press. c2001.

Kampa, Kathleen & Vilina, Charles. *Magic Time 1 & 2*. Tokyo: Oxford University Press. c2001

Rivers, Susan & Toyama, Setsuko. *English Time 1-3*. Tokyo: Oxford University Press. c2001

勝山ひとみ、西垣知佳子、王金芳 「児童の英語力テストの結果に見る小学校英語の効果」『KATE Bulletin』
第20号 2006年 関東甲信越英語教育学会

『ケンブリッジ英検概要』 <http://www.mic39.com/cambridgegaiyou.htm> 2006年10月

『ケンブリッジ英語検定のご案内』 University of Cambridge Local Examinations Syndicate c1999

高橋 庸雄編 『英語の「授業力」を高めるために』 三省堂 2005年

中山 兼芳編 『児童英語教育を学ぶ人のために』 世界思想社 2001年

日本英語検定協会 広報課 (金沢市内受験状況問い合わせ) 2006年10月

日本英語検定協会ホームページ 英検受験状況 <http://www.eiken.or.jp/advice/index.html> 2006年10月

バトラー後藤裕子 『日本の小学校英語を考える—アジアの視点からの検証と提言』 三省堂 2005年

北陸学院100年史編集委員会編 『北陸学院百年史(部局史)』 学校法人北陸学院 1990年